平成２２年度活動報告

平成 22 年 11 月 6 日（土）天気良し。多くの市民が武蔵屋、吉岡まちかど博物館に来館した。ＷＩＮＷＩＮミニツアー舟・蔵町屋巡り（印西市主催）、印西市中央駅前公民館木下まちなみ見学隊、千葉ニュータウンの木刈三丁目町内会の市民団体、その他、今回は神奈川県大和市からの青年も吉岡まちかど博物館に来館していただいた。市民交流の輪を広げたいものである。

左：印西市中央駅前公民館木下まちなみ見学隊の皆様
　木下河岸の勉強をして、武蔵屋、吉岡まちかど博物館へ来た。手に手に木下河岸の勉強資料が見られた。
右：挨拶をする武蔵屋のご当主（武蔵屋の半纏を着て）
先週の町屋寄席、今回の団体対応と忙しい日々。武蔵屋の保存活用も「まちなか懇話会」と議論中。

左：印西市中央駅前公民館木下まちなみ見学隊の皆様
　この日、吉岡まちかど博物館には見学隊の他、木刈町内会の皆さま、市民の方々多数が来館し、活況を呈しました。中でも神奈川県大和市から来た青年は印西の「月影の井戸」を見、その足できたとのこと。
右：塾刊行の印刷物を販売する塾生。U、K塾生は新人である。地域の為に汗を流す人材を求めています。よろしくお願いします。
今、塾では、O塾生著の「成田鉄道史」、「木下の蒸気船銚港丸」、江戸期の吉岡家発行チラシの絵葉書等を販売し、木下河岸の歴史を知る学習資料として販売している。今回も多くの市民の方にお買い上げいただいた。ありがとうございました。活動資金、人材確保、今後の展望が大きな課題である。

平成 22 年 10 月 30 日（土）荒天。台風 14 号の影響で朝から荒天。開催が危ぶまれたが強運のせいか、夕方には小康状態になった。今年で早、三回目である。荒天の後にも係わらず、40 名を超す市民の参加でこの古民家は熱気に包まれた。今回は前座として伊藤会長による印旛高校スライド上映会、O塾生による素人技と思えない「切り絵」の実演を行った。なお、来賓として山崎市長も参加いただいた。武蔵屋を是非、来年は木下の観光情報センターとして活用したいと考えている。

左：荒天の中参加頂いた市民の方々　今年は玄関土間が改善され、土間の上にビールケースを置き、その上に更にラワン材を敷き、そこに椅子を設置した。直接土間に置いていた時と違い、見やすくした工夫が見られた。
右：前座として伊藤会長による印旛高校のスライド上映
今年、3 月に百年の歴史を誇る印旛高校は千葉ニュータウンに「印旛明誠高校」として再出発し、同校は廃校となった。これを偲び、3 月に吉岡まちかど博物館において「ありがとう、印旛高校展」を開催した。会場には地元だけあって同校ＯＢも多く、写真を懐かしいそうに見入っていた。

左：切絵実演中のO塾生。78 歳になる塾の最長老。多芸多才の方であること今回の切絵で更にその思いを強くした。成田鉄道史に詳しく、著作もある。又、絵が上手く、特に少女を書かせたら天下一品である。
右：あっという間に「木下音頭」を踊る女性が現れ、会場からはヤンヤノ喝采であった。本人曰く、「話しながら鋏を使うのは至難とのこと」で、確かに新聞を切っている時はいつもは滑らかな言葉がなく、別人のようであった。来年も是非やってもらうつもりになった。

左：金原亭馬治さん。千葉ニュータウンに在住である。ここに来るのを大変楽しみにしているとのこと。この歴史的空間、観客との距離が近く、絶妙とのことで一体感があるとのこと。
右：年々、貫禄がついてきた。この日は野田のお大尽に題材をとった小噺。近くで見ていた筆者もその話にのらされてしまった。
　終了後、塾生一同と懇親会。盛りあがった。地域の歴史的町屋で、地域の若手の落語を聞く。真打もそう遠くないことであろう。今度は師匠さんにも来て欲しいものだ。

平成 22 年 10 月 16 日（土）天気良し。利根運河 120 周年記念として、関宿城、野田、流山の 3 博物館が合同で企画展を開催した。当塾が根拠地としている吉岡まちかど博物館は利根運河とは大変縁が深い。それは明治期の吉岡家の当主であり、銚港丸船主であった吉岡七郎が利根運河の第三工区の掘削請負人であったからだ。また、銚港丸自体が明治 28 年 2 月 15 日から明治 35 年 4 月に売却されるまで利根運河を航行していたからにほかならないからである。当塾としては必見の企画展であったのである。

左：運河の水面にみる小鷺達。この日、水面にはカルガモ、青鷺が見られた。彼らは人に慣れているのか、なかなか飛び立たないのである。また、水中にはかなりの小魚が群れをなしていたのが印象的であった。或る塾生は「まるで時間がとまったようだ」との感慨を述べていた。
右：運河交流館で交流する塾生　ここは国土交通省の出先事務所である。NPO が運営している。多数のパンフをゲットした。武蔵屋もこのような観光拠点にすべく、今、武蔵屋では熱い議論がなされている。17 日（日）も午後 5 時 30 分から会合がもたれ、筆者も参加した。

左：ムルデルの碑と塾生　この碑は昭和 60 年、流山博物館友の会の人たちが中心となり、建設したものである。市民が歴史を掘起し、まちづくりに繋げている代表的事例で、敬服の至りである。ムルデルはここを設計し、工事を監督し、心血を注いだと思われるが、竣工 1 月前に何故かオランダに帰国している。期限切れとのことであるが何かありそうだと思うのは一人筆者のみではない。
右：ムルデルのレリーフ　9 月 14 日、日蘭両国の皇太子が利根運河を視察したそうだ。格好の親善の材料をここは提供している。これも市民が歴史を掘起した成果である。

左：関宿城博物館正門前の垂れ幕と塾生
「利根川舟運と利根運河」と書かれている。なかなかいい出来栄えで迷わずここで写真をとった。
　利根運河とドコーピル鉄道、いろは丸との関係がきちんと解説されていた。この点は利根運河を語る時、かなり重要な点である。即ち、ドコーピル鉄道は利根運河計画に平行して計画され、推進者は通運、銚子、銚港丸船主と敵対関係にあったいろは丸の航運会社が推進していたという

ことだ。千葉県は特に鉄道を推進していた。もし、いろは丸が競争に勝利していたら利根運河はなかったのである。
右：野田興風会館で講演する高崎哲郎氏。「オランダ人お雇い技術者と利根運河」。氏の講演で印象に残っているのは「ムルデルがホントにしかできなかったのか」という内容である。そういえば同時期、琵琶湖インクラインは大学を卒業したばかりの田辺が工事全般を取り仕切っている。当時、ムルデルの補助者として近藤仙太郎というこれも大学を出たばかりの若い土木技師がいた。琵琶湖インクラインに比べれば長いトンネルもなく、難易度も異なる。近藤だけではできなかったのか。そういう疑問が沸いてきた。また、何故、土木には全く関係のない素人の吉岡七郎が工事請負人になったのか。会社はこのような素人を何故選んだのか、不思議である。そして後に解雇しているのである。氏は政治家の圧力もあったのではと回答していただいた。真相は不明としとおこう。

今年は暑熱であった。10 月もお客さんを吉岡まちかど博物館に迎えました。

左：本埜公民館で学ぶ皆さん。本埜も印西市となった。ここには歌人の吉植庄亮がいた。その旧家もまだあると聞いている。
右：我孫子の歴史を考える会の一行の方。印西ふるさと案内人協会の先導のもと吉岡まちかど博物館へ来館しました。

平成 13 年 11 月、市主導の「木下まち育て塾」が発足し、以来、筆者は吉岡家の蒸気船研究、土蔵の保存再生に関わってきた。既に 9 年近い月日が経過せんとしている。当然、人は年とり、見慣れた木下も少しづつ変化する。平成 16 年 10 月の開館以来吉岡まちかと博物館も 6 年を経過せんとしている。あっという間のような気がする。この夏も酷暑の中、多くの市民が来館してくれました。ありがとうございました。

左右：吉岡家母屋（左）と吉岡まちかと博物館　見慣れた木下きっての歴史的景観である。母屋は大正元年築で近代の地盤面に立つ。この景観を何時までも残したいものである。この一体性が貴重なのである。木下の歴史経済の原点、吉岡家。この景観が近々、母屋が消えんとしている。残念だ。力の限界を思う次第である。

左：8 月 7 日　市主催のイベントで吉岡まちかと博物館へ来館した市民の方々。この日は参加者 8 名で、暑さが災いしている。
右：8 月 21 日　川巡り・我孫子散策の市民の一行。吉岡まちかと博物館の北側道路から吉岡まちかと博物館へ入ろうとしている。40 名が来館しました。当木下まち育て塾と共に木下を代表する市民団体（ＮＰＯ法人）水の郷ネットワークが主催したツアーで吉岡まちかと博物館へ来館した。舟による川巡り、そして歴史的建造物、両者が有機的連関をもっている。一方が無くなったら木下への魅力は無くなる。

左：ＷＩＮＷＩＮミニツアー舟・蔵町屋巡り（印西市主催）で吉岡まちかと博物館に来館し、伊藤会長の挨拶をうける市民の皆さん。40 名が来館した。お馴染みの光景である。
左：吉岡まちかと博物館の前で記念撮影。

7 月 25 日（日）午前 9 時。木下駅に同志社校友会千葉支部の一行の方々44 名が参集しました。昨年 8 月 29 日に一度下見をされており、其の熱心さには頭が下がります。名簿には昭和 26 年卒の方も見え、驚きました。その他遠く横浜、川崎からの方もいました。塾でもこれに対応すべく、また、資料代をいただくこともあり、最大限の努力をしてお迎えしました。配布資料は当日の散策図、吉岡、滝田、武蔵屋三館の案内チラシ、カラー絵葉書一枚（問屋引札または参詣案内記）、「蒸気船からみる木下の明治」の講義メモ、塾の 21 年度活動報告。そして、最も力点を置いた事業が平成 19 年度企画展パンフの再刊です。これは印刷屋さんを介さないで全くの手作業で、原稿修正、紙の選択、印刷、製本まで全て手作りでおこなったものです。この日は 9 時から手賀沼巡りと中央公民館での木下河岸講義の勉強（交互交代）、11 時に出発、滝田、厳島神社、武蔵屋と歩を進め、その後、利根川堤防散策、柏屋での懇親会、そして吉岡まちかど博物館見学で一日を終えました。塾からも筆者を交え、4 人の塾生が暑さの中、がんばりました。

左：晴天に恵まれ、船出を待つ。一時間コース。印西水の郷ネットワークが運営している。とても好評である。一時間 1000 円は十分、元がとれる。途中には大正 14 年、牧水が腰川家を訪問した際、半折に残した「はるけくてえわかざりけり沼のうへや近づき来る鷺にしありける」の歌碑もある。
右：さて、準備はいいですか。和気藹々の旅が始まった。

左：厳島神社で塾生と交流する校友会の方々。ここで久七団子が振舞われる。木下を代表する伝統の食である。緑の半被を着たＤ塾生。この日から案内事業に本格的にデビューした。よろしく。
右：中央公民視聴覚室で筆者の講義（「蒸気船からみる木下の明治」パワーポイントによる）を聞いた方々。筆者もついつい熱くなって話をした。参加者は木下の歴史とは無縁の方ばかりであるが、木下の明治を中心とする歴史をよく理解していただいと勝手に解釈しています。

左：この日の武蔵屋。いつもながら格調高いたたずまいである。吉岡家の母屋がなくなることが決まった今、この明治期、旅館でもあったこの建物をどう保存していくのか思案のしどころである。
右：綺麗に整頓された武蔵屋。この日は武蔵屋の奥様が準備してくれました。いつもながら戸の開け閉め一つでも大変です。ありがとうございました。

武蔵屋の前で記念撮影する一行。画面左手の看板には「ようこそ木下へ　同志社大学校友会のみなさま」としるされている。ご当主がかかれたもの。ご当主は「木下夢探訪」の主宰者でもある。木下の活性化に日々忙しくすごされている方だ。今年も又、さまざまなイベントがここ武蔵屋で開催される。このような建物をなくしてはいけない。「歴史と文化を活かしたまちづくり」は筆者が最も祈念するまちづくりの原型である。

左：利根川堤防で往時の木下河岸について説明を聞く方々。とても暑い。80 歳を超えるＯＢもいる。何とかここまできた。懇親会会場柏屋まではもう一息である。この日も利根川、いつ見ても見飽きない川である。そのゆったりした川面は見るものを和ませる。
右：柏屋での大懇親会。壁に同志社大学の校旗が見える。40 年前以上に京都で青春時代を送った方々はここで鰻を食べながらひとしきり学生時代に戻っていた。この日参加した塾生も同伴していただいた。最後に校歌と応援歌を一同で歌いお開きとなったが、そのパワーに塾生一同、圧倒されました。

吉岡まちかど博物館で記念撮影。ホンとにご苦労様でした。水の駅、木下の旅はどうでしたでしょうか。皆様は大部分千葉県の方。是非とも又、伝統の食、舟、まちかど博物館めぐりに来て下さい。ご来駕ありがとうございました。塾生一同より

麦茶で乾杯去る７月８日(木)９時３０分から､むじな池跡コスモス畑で木下小学校の４年生６０人と先生方４人。そしてまち塾の会員５人の参加でコスモスの種まきを行いました。まず、先にひまわりを植えたところの草取り、そして次にメインのコスモスの種まき。最後にみんなで「きれいな花を咲かすぞ!」と麦茶で乾杯!梅雨の合間の晴れ間で、いい汗をかきました。秋の木下のお祭りに花を添えることでしょう。（文責及び現地写真　伊藤特派員報告）

左：全員集合、伊藤会長から説明を聞く児童達。天気に恵まれ先ずはよかった。
右：さて、そろそろやるか。これに至るまで、草取り等の準備は全て伊藤会長がやったことを君たちは知っているかな。

左：さて、一列に並んでください。少し畝を掘っていますからそこに種を蒔いて下さい。
右：作業も終わり、缶ビールといきたいとところです。作業のあとの麦茶は格別。将来は塾に入りたいという児童が沢山いたそうです。という夢を見ました。

平成 22 年 4 月 3 日（土）午前 10 時、印西市中央公民館に於いて、木下まち育て塾の平成 22 年度定期総会がありました。事業計画及び予算が承認された。次に主なものを紹介します。日程表等を参照してください。22 年度はこれまで塾の重要な活動資金であった印西市の助成金も事実上無くなりました。今後は自主財源の一層の確保が求められることになりました。財源調達については①刊行物（冊子、絵葉書）の販売　②寄付金の依頼等です。いずれにせよ厳しい財政難であることはまちがいありません。

　今年度の最大の課題は吉岡まちかど博物館の改修です。老朽化の進む、この木下を代表する吉岡家土蔵の安心・安全を更に確保するため、印西市のまちづくりファンドの活用を意図し、申請することとしました。

　又、今年度から秋の恒例行事であった市民祭りも現時点で廃止になってしまいました。財政難とのことですが、理解できません。市民任せのみでまちづくりはできません。市も市民と共に汗をかく、協働の精神はどこへいってしまったのか？

1　主な事業計画

①　蔵・町屋の保存活用

A　吉岡まちかど博物館

a　今年も定期開館事業（毎月第一土曜日午後 1 時から午後 4 時迄）を柱に次の事業等を行います。

b　安心・安全確保を意図する改修に向けた「印西市まちづくりファンド」への申請。
これまでも様々に手を入れてきましたが、老朽化が進んでいる現状に鑑み、ファンドに申請し、6 月の一時審査、年末の第二次審査に計画が認められれば、改修事業に着手し、23 年秋にはリニューアルオープンする予定です。その際には、市民の方々と作業を行いたいと思っています。よろしくお願いします。

c　竹垣整備
昨年来から、吉岡家庭に自生している竹を伐採し、少しずつ作業を進めています。更に多くの市民の方々の参加を希望しています。一部、灯篭周りは完成しました。

d　自主企画展
ミニ企画展「成田山参詣と利根川蒸気船交通」を秋に行います。

B　武蔵屋まちかど博物館
市民の皆様に大変好評であった、町屋寄席、町屋雛祭りを行います。

a　紅葉、町家寄席
秋の市民祭りも一段落した 11 月末頃、町屋寄席を行います。

b　町屋雛祭り
こちらも好評であった町屋雛祭りを行います。地元の方々との協働が雛祭りを盛り上げます。

C　その他　他のまちかど博物館（滝田、イシイ電器、二見屋）でも恒例の一斉開館を秋の市民祭り時に行います。

②　活性化事業

A

a　先進地視察事業
市民を中心にまちづくりをすすめている先進地を市民とともに視察します。時期未定

b　木下むじな池コスモス菜の花畑整備